

Q：炎症性腸疾患の歯科治療の注意点について

A：

【病気のポイント】

- ・ クロウン病と潰瘍性大腸炎は腸管の慢性炎症を引き起こす病気で炎症性腸疾患と総称される。
- ・ 原因は不明で遺伝的因子に環境因子が関与して発症すると考えられている。
- ・ クロウン病は若年層に好発し、回盲部を中心に消化管のどこにでも病変が出現する。主な症状は、腹痛・発熱・下痢・体重減少である。
- ・ 潰瘍性大腸炎も若年層に好発し、慢性下痢や粘血便が主症状である。

【歯科治療時の注意点】

- ・ クロウン病では口腔内にアフタ性口内炎が見られることがある。
- ・ ストレスにより病状が悪化することがあるので出来るだけ不安や恐怖を与えないよう注意する。
- ・ 炎症性腸疾患で下痢を来している場合、長時間の歯科治療中に便意を催す可能性がある。事前に排便を済ませ、治療中もトイレを使用できる旨を説明しておく。
- ・ 炎症性腸疾患の患者は、ステロイド薬や免疫抑制剤が投与されていたり、栄養状態が不良であることがあり易感染状態であることが多い。外科処置を行うときは抗菌薬の術前投与を行い、術後の治癒不全に注意する。
- ・ 血液凝固能の亢進に対して抗血栓療法が施行されていることがあり、出血傾向がないか確認しておく。
- ・ 炎症性腸疾患では深部静脈血栓症を合併し、肺血栓塞栓症を発症することがある。安静時から急な起立・歩行、排便時に発症しやすく、突然の呼吸困難や胸痛を訴えることがあればすぐに担当医師に連絡し、救急搬送を検討する。

【投薬時の注意点】

- ・ NSAIDs は炎症性腸疾患の増悪危険因子であり、不必要な投薬は避ける。
- ・ 抗菌薬投与により出血性腸炎や偽膜性腸炎などの薬剤起因性腸炎を発症することがある。抗菌薬投与中もしくは投与後に水様性～血性下痢、腹痛、発熱などを呈する場合はすぐに投与を中止し、担当医師に相談する。

参考文献：病気を持った患者の歯科治療～医科から歯科へのアドバイス～